

詩篇11-16篇「だれも神を認めない時」

1A 逃げる誘惑 11

1B 「拠ろ所が壊される」 1-3

2B 天に置かれる王座 4-7

2A 嘘やへつらいの時代 12

1B 舌の力 1-4

2B 御言葉による守り 5-8

3A 嘆きの中で輝く目 13

1B 出口の見えぬ苦しみ 1-4

2B 恵みによる喜び 5-6

4A 神はいないとする愚 14

1B 一人もない義人 1-3

2B 迫害者に対して立ち上がる主 4-7

5A 神の幕屋に住む者 15

1B 聖なる神の宿るところ 1

2B 正しく歩む者 2-5

6A 主の前にある喜び 16

1B 主のみに頼る信仰 1-4

2B 主ご自身の与えられる分け前 5-8

3B 墓を越えた楽しみ 9-11

本文

これから詩篇 11 篇から 16 篇までを読んでいます。ここの箇所をまとめるなら、「だれも神を認めない時」となるでしょうか。自分の周りがすべて神を度外視している、そして自分が神に拠り頼むことを嘲笑うというような状況で、私たちがどのように生きればよいのかを見ていきます。

1A 逃げる誘惑 11

1B 「拠ろ所が壊される」 1-3

11 指揮者のために。ダビデによる 11:1 主に私は身を避ける。どうして、あなたたちは私のたましいに言うのか。「鳥のように、おまえたちの山に飛んで行け。11:2 それ、見よ。悪者どもが弓を張り、弦に矢をつがえ、暗やみで心の直ぐな人を射ぬこうとしている。11:3 拠り所がこわされたら正しい者に何ができようか。」

私たちは詩篇を読み、何度も「主に身を避ける」という言葉を見てきましたね。私たちには、平安でいられるのに二つの保障が必要であることを話しました。食べていける、養われる必要と、もう

一つは守られているという、安全や防衛の必要です。詩篇は、ダビデがサウルやアブシャロムに追われる生活が背景にあり、またバビロンからの帰還民が敵から囲まれていることが背景にあるので、防衛の必要についてもっと敏感です。主との関係こそが、私をあらゆる敵から守ってくれるという確信が、「主に身を避ける」という言葉に表れています。

そして、ダビデは「あなたたち」と言っています。彼らは誰のことでしょうか？もしかしたら、ダビデの周りにいた家臣や友人たちだったかもしれません。アブシャロムに追われて、エルサレムを離れて、それで、「エルサレムから離れてしまったのだから、もう拠り所はなくなってしまった。」と言っているのかもしれませんが。それは人間的にはもっともな意見でした。悪者がやって来て、拠り所を失ってしまったのだから、これ以上、前に進むことはできない。どこかに逃げましょうというのは正しい意見でした。

ここで大事なものは、「心の直ぐな人」という表現です。心がまっすぐに、主に拠り頼んでいる心です。そして次の節に「正しい者」とあります。この正しさは、倫理的な正しさではなく、主に信頼しているのだから、主が彼を正しいと認めておられる、信仰の義について話しています。信仰によって自分を守っているダビデの魂に、悪者どもが矢を放とうとしています。私たちにも絶えず、この圧力がかかります。ただイエス様だけを、自分の拠り所としていこうとする時に、悪霊の火矢が飛んできます。心の直ぐな人に対する悪者の矢であります。

そして次に、私たちが主をあがめる拠り所がなくなってしまった時に、もうそれで終わりだと思ってしまうことです。例えば、自分たちが礼拝するところが使えなくなった、ということがあるかもしれません。聖書を読むべきその目が、事故で失明になってしまった、ということがあるかもしれません。最近、精神的な疲れで、数か月教会にも出ていくことができなくなるほど引きこもり状態になってしまった牧師さんと会いました。もう主への奉仕生活は終わってしまうかとも思われたそうです。このように自分の支柱を失ってしまいそうな時があります。それに対して、ダビデはこう答えます。

2B 天に置かれる王座 4-7

11:4 主は、その聖座が宮にあり、主は、その王座が天にある。その目は見通し、そのまぶたは、人の子らを調べる。

ダビデは、地上のエルサレムに目を向けるのではなく、主の住まわれる天を見つめました。ここですね、主が御座を設けておられる天を見上げること、そしてこれらの状況において、例えエルサレムから離れていたとしても、主は全く影響を受けておられないことを見ることはとても大事であります。イザヤが、ウジヤ王が死んだ後で、主なる神の御座の幻を見ました。そして、そこにはセラフィムがおり、「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな」と叫んでいました。イザヤは、ウジヤを見て、神を愛する彼であるからユダは守られていたと安心していましたが、彼がいなくなった時に初めてまことの王座である、主の御座を見上げることができたのです。私たちにも、頼っている人、頼って

いるものがあるかもしれませえん。確かに、その人を通して主に従えているかもしれませんが。しかし忘れていけないのは、主ご自身が御座におられること、この方が支配されていることです。

11:5 主は正しい者と悪者を調べる。そのみこころは、暴虐を好む者を憎む。

主はすべての事を見ておられます。調べつくしておられることを知ることは大切です。「御霊はすべてのことを探り、神の深みにまで及ぶからです。(1コリント 2:10)」神は御霊によって、人々の心の隅々まで知りつくしておられます、探っておられます。

11:6 主は、悪者の上に網を張る。火と硫黄。燃える風が彼らの杯への分け前となろう。11:7 主は正しく、正義を愛される。直ぐな人は、御顔を仰ぎ見る。

悪者に対する裁きは、第一に網です。前回、悪者は自分で仕掛けた罠に自らかかるところを読みました。自分の行なった悪に対して報いを受けます。そして第二に火と硫黄です。これは、黙示録 19 章の最後に、最後の審判を受けた者たちが投げ入れられる所と同じです。

それに対して、主は正義を愛されます。その正義とは再び、主に対して直ぐな心を持っている人が、主から与えられる正義です。へりくだり、自分は罪人であると認め、神のみが正しいとする人であり、そしてそのような人は、「御顔を仰ぎ見る。」とあります。そうです、主が天から全ての人を見通しておられると同時に、直ぐな人も神の顔を見上げています。双方が互いに見ています。親しい交わりをしています。

2A 嘘やへつらいの時代 12

1B 舌の力 1-4

12 指揮者のために。八弦の立琴に合わせて。ダビデの賛歌 12:1 主よ。お救いください。聖徒はあとを絶ち、誠実な人は人の子らの中から消え去りました。12:2 人は互いこうそを話し、へつらいのくちびると、二心で話します。12:3 主が、へつらいのくちびると傲慢の舌とを、ことごとく断ち切ってくださいますように。12:4 彼らはこう言うのです。「われらはこの舌で勝つことができる。われらのくちびるはわれらのものだ。だれが、われらの支配者なのか。」

12 編は 11 篇の姿をさらに掘り下げています。つまり、心の直ぐな人の魂に矢が放たれています。心の直ぐな人が頼っているものが取り去られています。聖徒たちがいなくなっています。誠実な人が消えてしまっています。社会が、嘘とへつらいで、二心で話しています。そこにあるのは舌にある傲慢です。「口でごまかしていれば、私たちはこの世の中で生きていけるのだ。」というものです。

私はまるで、現代社会を見ているような気がします。私たちは民主主義社会に生きていますから、

物理的な暴力を受けたら罰せられます。けれども言葉については表現の自由がありますから、言葉についての無責任は非常に大きくなっています。そして、それもまことしやかに、他の人たちに知られずに傷をつけたいと思う者にだけ傷つけることができます。こうしたへつらいの言葉の社会になっています。

私は先週、非常に恐ろしくなったことがありました。リチャード・ドーキンズという無神論者で進化論を信奉する科学者が、とんでもない発言をしたのです。母親の出生前診断でダウン症であることが判明したら、その子を産むことは非道徳であると言ったのです。私は一つの経験があります。大学生の時にバイトで、知的障害者の子の世話をしていました。ただ遊ぶだけです。そこでだんだん分かってきたのは、その子にはへつらいというものが皆無だということです。自分を他人によく見せようという思いがこれっぽっちもありません。すべて素で生きているのです。その子といると、私はほっとしました。そこで健常者とされている私たちが、その与えられている神からの賜物である、言葉や知性を使っていかに罪を犯しているのかに気づきました。知的障害者は、私たちに神へのへりくだりを教えてくれます。本来生きなければいけない模範を示してくれています。

2B 御言葉による守り 5-8

12:5 主は仰せられる。「悩む人が踏みにじられ、貧しい人が嘆くから、今、わたしは立ち上がる。わたしは彼を、その求める救いに入れよう。」12:6 主のみことばは混じりけのないことば。土の炉で七回もためされて、純化された銀。12:7 あなたが、主よ、彼らをお守りになります。あなたはこの時代からとこしえまでも彼らを保たれます。

主が立ちあがってくださいます。立ち上がるとは、ご自分の約束や契約、またご自分の性質にしたがって、実行に移し力を行使されるということです。覚えていますか、イスラエルがエジプトで奴隷状態の中で苦しみ、叫んでいた時に、主はアブラハム、イサク、ヤコブへの約束を思い出されました。それでモーセを遣わされたのです。そのことを主は行ってくださいます。誰に対してか、「悩む人」「貧しい人」です。主の前で自分はどうしようもない奴だと悔いている人、主がおられなかったら自分は無に等しいと思っている人、このような人々にとって嘘とへつらいに囲まれることは、極めて大きな圧迫です。主は、これを取り除いてくださいます。

そして、主はそれら人々のへつらいの言葉に対して、ご自分の言葉をもって対抗してくださいます。「主のみことばは混じりけのないことば。土の炉で七回もためされて、純化された銀。」という言葉は、その通りです。聖書ほど最も批評や批判を受けた書物は、歴史上ありません。しかし、聖書ほどその信憑性を保持されている書物もないのです。つまり、何度も試された上に、それでも残っている言葉であります。間違いのない、真実な言葉なのです。「この天地は滅び去ります。しかし、わたしのことばは決して滅びることがありません。(マタイ 24:35)」したがって、私たちはこの言葉によって新しく生まれました。そして、とこしえまで救う力が与えられます。

12:8 人の子の間で、卑しいことがあがめられているときには、悪者が、至る所で横行します。

ここは私たちが、しっかりと聞いてへりくだらないといけないことです。私たちは社会で悪者がはびこるのを見て、嘆きます。けれども、それは元々、人々が卑しいことをあがめているからに他なりません。なぜ、例えば自分が妊娠して、それで生まれた子を殺して捨てるのか？それは、まさにリチャード・ドーキングズのような卑しい考えが受け入れられているからです。けれども、ドーキングズさえその反論には一理あるのです。事実、ダウン症の子は彼の考えのとおり、90%以上の母親が中絶していて、私はそれを口に出して発言したまでだ、というのです。

ですから、私たちは社会の中に悪を見る時に、卑しいことを人々が受け入れ、もしかすると私たち教会も「仕方がない」として許容していないか？悔い改めと執り成しの祈りを捧げることから始めるべきでしょう。

3A 嘆きの中で輝く目 13

1B 出口の見えぬ苦しみ 1-4

13 指揮者のために。ダビデの賛歌 13:1 主よ。いつまでですか。あなたは私を永久にお忘れになるのですか。いつまで御顔を私からお隠しになるのですか。13:2 いつまで私は自分のたましいのうちで思い計らなければならないのでしょうか。私の心には、一日中、悲しみがあります。いつまで敵が私の上に、勝ちおごるのでしょうか。

詩篇に数多く出てくる「嘆きの詩篇」です。嘆きの詩歌の特徴は、「いつまで」という言葉です。どのように考えてみても、出口の見えぬ苦しみを表しています。そこで大事なものは、ダビデのように言い表すことです。その嘆きと苦しみを主の前に話してしまうことです。ヤコブ書 5 章に、「あなたがたのうち苦しんでいる人はいますか。その人は祈りなさい。(13 節)」とあります。ある姉妹がこの前、「主に対して甘えていいのだ。」というようなことを仰っていました。まさに、その通りです。私たちは人に甘えてしまいます。しかし、人は神の代わりはできません。神に甘えるのです。

13:3 私に目を注ぎ、私に答えてください。私の神、主よ。私の目を輝かせてください。私が死の眠りにつかないように。13:4 また私の敵が、「おれは彼に勝った。」と言わないように。私がよろめいた、と言って私の仇が喜ばないように。

再び出てきました、主がご自分の目で見ておられます。主が見てくださること、目を注いでくださることをダビデは願って求めています。そして、主が見てくださることによって、今度は、「私の目を輝かせてください。」と願っています。目に光が与えられること、そして見えるべきものが見えるようになることを祈っています。真理に対して目が開かれるように祈っているのです。イエスは「からだのあかりは目です。それでももしあなたの目が健全なら、あなたは全身が明るいが、もし目が悪ければ、あなたの全身が暗いでしょう。(マタイ 6:22)」と言われました。見るべき方をしっかりと見る、

その輝きを自分の目にくださいということです。

2B 恵みによる喜び 5-6

13:5 私はあなたの恵みに拠り頼みました。私の心はあなたの救いを喜びます。13:6 私は主に歌を歌います。主が私を豊かにあしらわれたゆえ。

1 節から 4 節まで嘆きの言葉でした。そしてここで主をほめたたえます。少しずつダビデの魂が引き上げられるのを感じ取れたでしょうか？1-2 節は、単に嘆いていました。3-4 節は、主に目を輝かせてくださいと願い求めています。そして 5-6 節でこのようにほめたたえることができています。以前も紹介しましたが、賛美を作り出したウィリアム・クーパーの言う通り「最も弱い聖徒がひざまずくのを見ると、サタンは震えあがる。」のです。主の前に祈ること自体が、霊的勝利の始まりです。

ダビデは、「恵みに拠り頼みました」と言っています。ここが詩篇 13 篇の鍵です。嘆きの時、苦しんでいる時は、私たちは自分が何を行なったのか、何をしてきたのか、そういったことで苦しみ悩みます。また、他人がこんなことをした、言ったということで悩みます。しかし、それらはみな人の子が行っていることです。しかし、恵みは神が行っておられることであります。神が一方向的に人に対して好意を寄せて、神が神であるからこそ祝福してくださるのが恵みです。私たちの行為に関わりなく、祝福して下さいます。私たちが、自分たちの行ないに関わらず事を成し遂げてくださる神に目を留める時に、私たちに救いの働きを神は始めて下さいます。

そしてダビデは歌っていますが、「主が私を豊かにあしらわれたゆえ」と言っています。この「豊」は良くして下ったということです。主は良い方であり、その良さが自分にも向けられたのだということです。

4A 神はいないとする愚 14

そして次もまた、神をあがめる人が周りにいない状況を描いています。

1B 一人もいない義人 1-3

14 指揮者のために。ダビデによる 14:1 愚か者は心の中で、「神はいない。」と言っている。彼らは腐っており、忌まわしい事を行なっている。善を行なう者はいない。14:2 主は天から人の子らを見おろして、神を尋ね求める、悟りのある者がいるかどうかをご覧になった。14:3 彼らはみな、離れて行き、だれもかれも腐り果てている。善を行なう者はいない。ひとりもいない。

私たちの周りでは、「神はいない」とする立場はあまりにも当たり前になっていますね。ダビデはこの状態を「愚か」とであると明言しています。ここで言っている神はいない、とする立場は、何モリチャード・ドーキンズのような、知的に神はいないという立場を取っている無神論者のことだけを言っ

ているのではありません。むしろ、神について生活の中で度外視している人たちのことです。パウロもこのような愚かさを、ローマ 1 章で述べています。「というのは、彼らは、神を知っていながら、その神を神としてあがめず、感謝もせず、かえってその思いはむなしくなり、その無知な心は暗くなったからです。彼らは、自分では知者であると言いながら、愚かな者となり、不滅の神の御栄えを、滅ぶべき人間や、鳥、獣、はうもののかたちに似た物と代えてしまいました。(1:21-23)」

そうすると、彼らは腐っているとダビデは言います。それはちょうど、ノアの時代と似ています。「地は、神の前に墮落し、地は、暴虐で満ちていた。神が地をご覧になると、実に、それは、墮落していた。すべての肉なるものが、地上でその道を乱していたからである。(創世 6:11-12)」ローマ 1 章でも、これら忌まわしい事ごらを、神がいなしているために行なっているのだと言っています。

そして、主が見ておられます。再び、主が見ているという表現が出てきます。気を留めて、だれかいないかとじっくりと見ておられるということです。ところが神に応答するような人は一人もいませんでした。この、「善を行なう者はいない。ひとりもない。」という言葉はとても有名です。なぜなら、パウロがローマ 3 章で引用したからです。文語では、「義人なし、一人だになし。」という言葉で有名です。しかし、この言葉を知ること、聖書全体に貫かれている神の主張を受け入れることであります。アダムから始まる人類が、誰一人として善を行なうものがいなかったという事実です。義人とされたノアでさえ、洪水後に全裸になって泥酔していました。聖書は徹頭徹尾、正しいのは、善であるのは神のみだという立場を証言しているのです。

それでも神は、人に関わっておられるというのが聖書の物語です。失敗をする人間にそれでもかというばかりにあきらめず、見捨てずに関わっておられます。この恵みと憐れみは驚くほどです。したがって私たちは、神が見ておられるのと同じように人を見なければいけません。相手は罪人なのだ、ということです。そして罪人なのであれば、私たちはその罪を軽くみでは決していけないのですが、その人を受け入れるのです。人の罪深さの深さを知れば知るほど、私たちは神への恐れと、神の恵みのすばらしさを知ることができます。

2B 迫害者に対して立ち上がる主 4-7

14:4 不法を行なう者らはだれも知らないのか。彼らはパンを食らうように、わたしの民を食らい、主を呼び求めようとはしない。14:5 見よ。彼らが、いかに恐れたかを。神は、正しい者の一族ともにおられるからだ。14:6 おまえたちは、悩む者のはかりごとをはずかしめようとするだろう。しかし、主が彼の避け所である。

ダビデはおそらく、バビロン捕囚の民を預言して語っているのではないかと考えられます。バビロンの地で、イスラエルの民が虐げられています。神の民ということだけで、彼らは迫害を受けました。虐げる者たちの姿を、「主を呼び求めようとはしない。」と言っています。ここから分かるのは、祈りをしない者は神がいないと心で言っているのに等しいということです。私たちでさえ、祈る

のを忘れ、自分の意見や自分の主張、自分の力で生きようとするのなら、神がいらないと言っているのに等しいです。そして、神を尋ね求める者たちを結果的に迫害しています。

しかし、ここで望みがあります。神は正しい者の一族と共におられるということです。かつて、イスラエルの民をモアブの王は恐れしました。モアブの草原に宿営しているのを、彼は見て、バラムを雇い、イスラエルを呪おうとしたのです。しかし、ここにあるように辱めようとしても、主が避け所となっ
てくださいます。主が終わりの日に正しい者たちを迫害したことに対する報いを、迫害者に対して
行なわれます。

14:7 ああ、イスラエルの救いがシオンから来るように。主が、とりこになった御民を返されるとき、
ヤコブは楽しめ。イスラエルは喜べ。

これは、神の箱のあるシオンから、離れている離散の地で救いが届き、それで捕われの民が帰
還することができる、ということです。そしてもちろん、終わりの日の幻もここにはあります。天の四
方から、選びの残された民がイエス様が戻って来られる時に集められます。

そして、その時には喜びと、楽しみがあります。喜ぶこと、楽しむことには、自発的な動機があり
ます。何かに強制されたのではなく、ただ主を愛しているからという自発的なものがあり、それで喜
んで楽しんでいるのです。喜ぶのは、単に感情的に喜んでいることではありません。自発的な献
身があれば、そこには感情には左右されない深い、確信に満ちた喜びがあります。愛に支えられ
た喜びです。

5A 神の幕屋に住む者 15

ここまで私たちは、神を尋ね求めない愚か者、神を度外している者たちに囲まれている信仰者
がどのようにして守られ、救われるのかを見ました。すべてが、主が見ておられることを求め、そし
て自分が主を見ることをしていく時に起こっています。15 篇と 16 篇は、そうした主の中に生きる姿
を描いています。

1B 聖なる神の宿るところ 1

15 ダビデの賛歌 15:1 主よ。だれが、あなたの幕屋に宿るのでしょうか。だれが、あなたの聖な
る山に住むのでしょうか。

誰もが神を認めないような時代に生きていても、主の住まわれる所に行くことが私たちを救ってく
れます。ダビデはエルサレムにある幕屋にずっといることを願っていました。そして、聖なる山、エ
ルサレムに住むことを願っていました。それは、そこそが自分が主の中で身を避けることができ
たからです。

2B 正しく歩む者 2-5

15:2 正しく歩み、義を行ない、心の中の真実を語る人。15:3 その人は、舌をもってそしらず、友人に悪を行なわず、隣人への非難を口にしない。15:4 神に捨てられた人を、その目はさげすみ、主を恐れる者を尊ぶ。損になっても、立てた誓いは変えない。15:5 金を貸しても利息を取らず、罪を犯さない人にそむいて、わいろを取らない。このように行なう人は、決してゆるがされない。

主の幕屋に宿り、聖なる山に住む者は、そのまま他者に正しいことを行なう人であると言います。イエス様は、主なる神を愛しなさいという戒めを語られて、それから自分自身のように隣人を愛しなさい、と言われました。神を愛して、隣人を憎むことはできません。必ず神との関係は、他者との関係とつながっています。目に見える兄弟を愛せなくて、目に見える神を愛することはできません。親にしろ、上司にしろ、教会の指導者にしろ、愛をもって尊敬できないのであれば、神を敬うこともできていません。神は、人との関係の中にご自身との関係を示されます。

そしてダビデは、真実を語ることに焦点を当てています。舌をもってそしらないこと、友の悪口を言わないこと、隣人の非難を口にしないことです。さらに、誓いあるいは、約束を損得によって変えたりしないことです。つまり真実な関係を他者に対して、口から出る言葉によって持っています。そして、他者に善を行なっても、それによって自分がその人を支配するような関係を作りません。

そして、そのような人は「ゆるがされない」とあります。詩篇 11 篇には、山々に逃げろという助言があっても、主が天において御座におられるということで揺るがされなかったダビデです。主の中にいるも者は揺るがされることはありません。

といっても、私たちがこのことをきちんと行えているのでしょうか？ここに書かれていることを見れば、ことごとく失敗しているように思えます。ここで大切なのは、自分ではなくキリストだということです。自分ができているかできていないか、ということであれば、ことごとくできていません。けれども、キリストはこれらすべて正しいことを行なわれしました。私たちはゆえに、自分を捨てて、キリストだけになるのです。この方にしがみつき、この方に満たされるのです。その時、自分ではなくキリストが生きてくださいます。そして、これらの義の実を結ばせることができるのです。

6A 主の前にある喜び 16

そして最後の詩篇です。主のところにいることの喜びと楽しさを教えてくれる詩歌です。

1B 主のみに頼る信仰 1-4

16 ダビデのミクタム 16:1 神よ。私をお守りください。私は、あなたに身を避けます。16:2 私は、主に申し上げました。「あなたこそ、私の主。私の幸いは、あなたのほかにはありません。」

ダビデは、シンプルな献身をしています。それは、主ご自身の中に自分の身を置くという献身で

す。主の中にだけ、幸いがあるという決断です。私たちは、いろいろなところに幸いを見出そうとしています。例えば、先ほどのリチャード・ドーキンズについてですが、彼は母親が幸せを求める権利があるとして、ダウン症の胎児を中絶して新たな妊娠をすべきだと主張しました。伝道者のレイ・コンフォートはこのように批判しました。「ここに神ありきの世界とそうではない世界の違いがでている。神なき世界の目的は幸せであるが、神ありきの世界では目的は正義なのだ。」そうです、私たちは神の正義の中に幸せを見出すのです。もしそうでなければ、幸せのために人を押しつけて、殺すことさえ行ええし、事実、中絶は殺人なのです。

私たちが、先ほど説明したように知的障害者を敬うのはどこから来ているのでしょうか。主がこの人々に共におられるというところからくる幸せです。主の中にこそ幸せがあると決めているから、見えるものが見えるようになるのです。幸せは、他のいろいろなところにあるのではなく、主との関係の中のみに見いだされるものなのです。

16:3 地にある聖徒たちには威厳があり、私の喜びはすべて、彼らの中にあります。16:4 ほかの神へ走った者の痛みは増し加わります。私は、彼らの注ぐ血の酒を注がず、その名を口に唱えません。

ダビデが次に話しているのは、どの人々と自分を一体にするか、交わるかであります。ダビデは地に住む聖徒たちに威厳があり、彼らの中に喜びがあると言っています。ですから、神と交わり、そして互いに交わるところに喜びがあるのです。「見よ。兄弟たちが一つになって共に住むことは、なんというしあわせ、なんという楽しさであろう。(詩篇 133:1)」

そして、さらに主以外のところに幸せを見出す人々を、「ほかの神へ走った者」として話しています。神なしの生活をしている者は、実は自分自身の欲望が神となっています。そうした者たちとは交わらない、としています。これは世の人々と付き合わないということを意味していません。そうではなく、むしろ神の名を唱えながら、神なしの世界と同じことを考えたり、話していたりするなら、世と交わりをしていることとなります。

2B 主ご自身の与えられる分け前 5-8

16:5 主は、私へのゆずりの地所、また私への杯です。あなたは、私の受ける分を、堅く保ってくださいます。16:6 測り綱は、私の好む所に落ちた。まことに、私への、すばらしいゆずりの地だ。

ここで大事なことは、再び主ご自身がゆずりの地所、杯だということです。自分の幸せを何か他のところに求めるのではなく、主ご自身の中に自分の満足があります。そして、主がその中にある祝福を、守ってくださると明言しています。主は祭司に対してこう言われました。「イスラエル人の中にあって、わたしがあなたの割り当ての地であり、あなたの相続地である。(民数 18:20)」彼らには

割り当て地がありませんでした。けれども、主ご自身のそばにいて、そこで主に仕えること自体が大きな割り当てであるということです。ダビデは、祭司だけでなく主を愛する者たち皆が、そうであるべきだという考えでした。

そして「測り縄」というのは、どこまでが所有地になっているのかを測るものであり、そこを主が守ってくださいます。主ご自身の中に守られているその幸せを、今、測り縄によって言い表しています。

16:7 私は助言を下さった主をほめたたえる。まことに、夜になると、私の心が私に教える。16:8 私はいつも、私の前に主を置いた。主が私の右におられるので、私はゆるぐことがない。

ダビデが主にこそ幸せがあると宣言し、そして聖徒たちとの交わりに喜びを覚え、それから主こそがゆずりの地であると宣言したら、そこに助言が与えられました。主に語りかけられたのです。そして自分がその言葉の中にいられるというところに彼はこの上もない喜びを抱きました。その語りかけは実に慕わしく、夜になっても心に響いてきています。主が親しく彼に語りかけたのです。

そしてダビデは、さらに自分自身が主との交わりを深めています。「私はいつも、私の前に主を置いた。」とあります。すべての事がらについて、主を認める行為です。どんな些細なことでも、主がおられるのだからという姿勢です。私たちは聖霊の学びを先週火曜日に行い始めましたが、聖霊はもうひとりの助け主で、私たちの生活のあらゆる面をイエスが助けられたように助けてくださるということでした。ですから、私たちはこの方を無視して生きていたら、実にもったいないです。絶えず、主がおられることを意識することによって、主が現れてくださいます。

そして、次に「主が私の右におられる」とあります。これは、午前中に話しましたが自分を支えている印です。右にいる花婿が花嫁を支えて、導いて、覆って守ってくれているように、主が右におられて守っておられます。だから、揺るぐことはありません。

3B 墓を越えた楽しみ 9-11

16:9 それゆえ、私の心は喜び、私のたましいは楽しんでいる。私の身もまた安らかに住まおう。

心においても、魂にもおいても、そして自分の身においても喜び、楽しみ、安らぎを得ています。

16:10 まことに、あなたは、私のたましいをよみに捨ておかず、あなたの聖徒に墓の穴をお見せにはなりません。16:11 あなたは私に、いのちの道を知らせてくださいます。あなたの御前には喜びが満ち、あなたの右には、楽しみがとこしえにあります。

ここは数少ない、旧約聖書における復活の約束が書かれている箇所です。しかも、ダビデの子であるキリストご自身のよみがえりを預言したところです。死さえも、主との交わりの楽しみを奪うことはしません。死後にとこしえの楽しみが待っています。主の前にある喜びが待っています。

ある牧師さんとの交わりで、彼がこんなことを話してくれました。「今、牧師たちが不祥事を起こしたりと色々な大きな問題を起こしている中で、自分は最後まで走り抜かなければいけないと思っていた。けれども、その「最後」ということさえ、それは自分が設定する最後ではなく、主がすでに設けておられる最後、終わりがあるのだ。」そうです、私たちの最後は主がすでに定めておられるのです。終わりは、イエス様を信じた時に、「すべてが新しくなりました」という言葉を言うことができる程、はっきり定まっているのです。イエス様はいつくるか分からないのです。

だから、これからの歩みは終わりから始まっています。いのちの道から始まっています。永遠のいのちを持ち、死んでもよみがえるという期待から始まっています。そこで私たちは、自分を捨てることができるのです。神の国の幻だけを見ていることができるからです。これから積み上げていくものは必要なく、ただ神の御心を行なうことに心を注げばよいのです。自分で何かをやっていこうとするのか、それとも主がなされようとすることに、自分を従わせるか、その選択であります。